館蔵品紹介

尾形光琳・乾山合作「鉄絵山水文四方火入」

—高さ10.8cm.幅11.5cm.—

御室焼の陶工野々村仁清に陶法を学んだ尾形深省（名は惟充。1663～1743）は、元禄12年（1699）に、かねてより念願であった窯を京都の鳴滝泉谷（なるたきいずみだに）の地に開きました。ちょうど、この地が京都の西北（乾の方角）にあたるので、その窯の名を「乾山」（けんざん）と名付け、作品にもそれを記して銘としました。後、この「乾山」の名は彼の別号としても使われ、今日では普通尾形深省のことを尾形乾山と呼んでいます。

さて、この鳴滝泉谷の窯では、成形、施釉、焼成などの技術面は押小路焼の陶工孫兵衛と、仁清の長男清右衛門の二人にまかせ、乾山はもっぱら器形や図案、絵付けの意匠面をうけもちました。また、絵付けについては、乾山が「道具の形、模様等を私、其上同名光琳に相談候て、最初の絵は皆々光琳自筆に画申候、爾今絵の風流規模は光琳このみ置候通を用ひ、又は私新意をも相交ひ」（『佐野伝書』）と自ら述べているように、開窯当初は画家である兄尾形光琳（1658～1716）が主に画筆をふるい、乾山の方は得意の能筆でもって賛や乾山銘を書きました。後述しますが、光琳の絵付けは、乾山の前の記述と違って、光琳の江戸滞在期（宝永元年から6年 1704～1709）をのぞく、鳴滝泉谷窯の最晩年まで行なわれていたようです。

乾山は光琳が絵付けしやすいように器形をととのえました。すなわち、色紙形や六角形の平皿、立方体をした火入などがそれです。一番多いのは色紙形の平皿ですが、これはたんなる書画鑑賞のためのみでなくて、ちゃんとした懐石道具の八寸としてのきまりの器形に作られております。そして、乾山は鉄絵（銹絵ともいい、鉄砂に呉須をまぜたもので描き、後に透明釉をかけて焼く）を生かすために、長年工夫した独自の白化粧がけを素地に施しました。一方、光琳は弟の古典に対する深い教養と文人趣味を理解して、モティーフにはそのようなものを選んで絵付けしました。この共同制作は、彼らの芸術に新生面を開くきっかけになりました。そして、この時期は二人の芸術生活の中で、最も楽しいひとときであったと思われます。彼ら二人のこころの中に、かつて鷹が峰で芸術生活を送った本阿弥光悦のことが去来していたにちがいありません。この兄弟合作になる雅趣豊かな鉄絵陶器は、当時の数寄者の好評を博し、数多く制作されたようです。なかでも、当館所蔵の「鉄絵山水文火入」（写真1・2）は、兄弟合作の白眉とされ、ことに有名であります。

（1）

（2）

この火入は白化粧がけした側面（四面）をめぐって、室町水墨画風に楼閣山水図ののびのびとした筆致で描かれ、一面に「青々光琳」の落款と花押が書かれています。器は全体的にやや厚手に成形され、底の四隅には雲形の脚が付けられ、外底には大きく「乾山」の銘が書かれています。この絵付けは、側面の上下に引かれた界線の内に、図柄が展開するように施されており、一種の画巻のようにあらわされているのが特徴です。この四面を巧みに使った画面構成は、画幅などとはまた一味違った自由なおもしろさがあります。

光琳が江戸に滞在していた頃（宝永年間）に、毎日雪舟を五、七幅も見て勉強していることを上嶋源丞宛の書簡（当館所蔵）の中で述べています。そのことは、この火入の図柄のうち、雪舟風の近接的にとらえた楼閣の構成や、雪舟画に認められる中央に屋形のある特徴的な橋の表現があることによってもうかがわれます。また、光琳は雪舟と同様に、雪村に深く私淑していたようで、雪村の印章を模刻したものを持っていた事実（「小西家旧蔵光琳資料」）によってもわかります。また、光琳画の中に、雪村画から特異な構図法を学んだ作品があることを指摘することができます（例えば、米国シアトル美術館の「破墨山水図屏風」）。この火入においては、山かげの竹林に囲まれた茅屋、そして湖水を背景として前面にそそり立つ一本の松の木へと展開する画面構成（写真5）は、光琳が雪村の山水図（写真4）を忠実に模写することによって得た成果であると考えられます（写真3）。また、火入の山水図における簡略化した岩の皴法も、雪村の楷体山水図から影響をうけたものと思われます。光琳が雪舟、雪村などの室町水墨画を真剣に学習したことは、これらの遺品や文献によって確かめられますが、おそらく彼は水墨画の骨法を深く学ぶことによって、江戸滞在期における芸術上の壁を打破しようとしたのではないでしょうか。この火入は、そのような学習の成果の一つと考えられます。

この火入の制作年代については、前出の『佐野伝書』の記述から、乾山の鳴滝泉谷時代の初期、すなわち元禄13年（1700）、14年頃とされていましたが、最近、この火入にある光琳の花押の研究から鳴滝窯末期の正徳元年（1711）から2年とする説（山根有三氏「光琳・乾山合作銹絵四愛図四方火入」世界陶磁全集第6巻月報）がでています。この山根氏説は楼閣山水図の画風の上からも首肯されます。

（林　進）参考文献＝満岡忠成氏『乾山』平凡社刊。

（3）光琳模　雪村筆山水図（左）

（4）雪村筆　山水図（右）

（5）光琳筆鉄絵山水文四方火入の側面の二面を展開させた図

季刊 美のたより No.49
昭和54年 11月14日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.